

設問Ⅱ

【出典】 富田恭彦 「哲学の最前線」 講談社現代新書 1998年
32頁8行目から43頁11行目。なお、原文の字句・構成を一部省略・変更した部分がある。

【出題の意図】

本問は、法科大学院の学習に不可欠な能力である文章の読解力、論理的思考力および表現力を評価するものである。

文章（著者の主張）の内容を正確に把握できているか、それを設問における主張（著者の主張と異なる主張である）と比較させながら対立点を的確に指摘できているか、両者について説得力のある評価ができているか、等をみた。結論それ自体は、評点に反映させていない。文章の内容の説明に終始しているもの、すなわち設問に答えていない答案については、低く評価した。

問題文において展開されている内容を、設問における主張と対比させながら要約すれば、「客観的な理解のみならず、客観的な観察も不可能である。観察は（純粹に客観とはいえない）理論を通して行われる（観察の理論負荷性）。」となり、両者の対立点は、「客観的な観察が可能か、否か」という形にまとめることができる。この点が、指摘されていることが、まず求められる。

この枠組みを前提として、著者（文章）の主張に即した評価がなされていれば（それが、最も答えやすい選択であると考えられる）、解答に求められる水準として充分である。

「客観的」「観察」「理解」「理論」等の意味内容を検討し、明確にしようと試みているもの、文章の展開が論理的になされているものについては、加点した。

設問2

【出典】丸山真男『戦中と戦後の間 1936－1957』（みすず書房，1976）Ⅰ戦中「福沢に於ける秩序と人間」143頁から146頁まで。1976年に本書が刊行されるに際し、付された〔後記〕を含む。

【出題の意図】

戦後日本のオピニオンリーダーでもあった丸山真男による昭和18年の新聞掲載論説である。

福沢の思想に、一見すると、国家主義と個人主義という二面性があり、当時の論壇が福沢を国家主義者と見たように、この二つを切り離して捉えることを、丸山は強く批判する。法律家にとって、一見矛盾するかのようにみえる複数の条文であっても、矛盾として放置するのではなく、秩序ある規範構造として統一的に捉え直す能力が必要となる場合が多々ある。丸山は福沢をして、個人主義者たることに於いてまさに国家主義者だったと述べる。この意味を問題文から探り、400字以内で的確にまとめる能力があるかを見ようとした。1976年の〔後記〕まで問題文に含めたのは、本文理解のヒントとなると考えたが故である。

福沢の二面性を統一的に捉えんとする、丸山真男の問題意識にいかに肉薄し得ているかが評価のポイントである。